虹 サプライズの写真集

⑮⓪ 陶芸家に魅せられたカメラマン

愛用のカメラを構える山崎さん

「アマチュアカメラマン」と呼ばれると、山崎諭（やまざきさとし）さん(65)＝富山市＝はカチンと来る。「腰が違うんですよ。精神の入れ方が違う。撮影する時は自分の生死なんて関係ないと思っているから」。どこに出掛けるにも愛機のニコンＺ６を携える。すぐに気になったものや空間にレンズを向ける。

写真で身を立てているわけでも、由緒あるコンクールで受賞したわけでもない。しかし、自身の写真集はある。この４月に写真集『岩井窯（いわいがま）』を刊行した。モノクロの写真で構成したＡ４変形判の112ページの一冊だ。陶芸家の山本教行（やまもとのりゆき）さん(73)＝鳥取県＝とその家族の姿、創作の現場を切り取った。陶芸作品よりも、陶芸家の周りに漂う空気そのものを映し出したような写真は、どこか懐かしさと親しみを感じさせる。

写真はライフワークだが、映画にも愛情を注ぐ。９月の最初の土曜日には、ミニシアターで四つの作品を見た。「見逃した作品が実は名作だったら取り返しがつかない。見たいのは全部見ないとね」

富山市中心商店街の映画館に毎週のように行くため、界隈ではちょっとした有名人だ。顔見知りの店主やスタッフの写真をいつの間にか撮って、プリントして届ける。そして映画談義に花を咲かせる。「喜んでくれる。ありがた迷惑かもしれないけれど」

◇

高校卒業後、地元の工場に勤めた。しかし、職場ではどこか浮いた存在だった。同僚たちと交わす会話が憂鬱だった。話題のほとんどはパチンコと車の話ばかり。幼い頃にファンタジー映画の『メリー・ポピンズ』に胸を躍らせて以来、スクリーンに投影される物語に夢中になっていた山崎さんには、どうも居心地が悪かった。もっと黒澤（くろさわ）明（あきら）の劇的な映像表現について意見をぶつけ合いたかった。ドキュメンタリーの定義について語り合いたかった。２年で会社を辞めて上京した。

20歳で映画学校に入った。鈴木清順（すずきせいじゅん）ら映画の第一線で活躍する人たちが講師を務めていた。山崎さんも授業で短編映画を撮影した。しかし、憧れた映画業界はテレビの隆盛に押されて、斜陽の時代を迎えていた。映画業界での就職を模索したが、狭き門だった。仕方なく親戚の縁で銀座のカメラ店に勤めることになった。

店ではカメラメーカーから送られたデモ機や、修理のために預かったカメラは自由に使えた。山崎さんも店のカメラをいじっていたが、どうも写真には苦手意識があった。美意識が高いせいか、若さのせいか、写真は一枚の中にドラマが凝縮されるべきという思い込みがあった。それは才能ある人に許された魔法に見えた。

ある日、その魔法が使えた気がした。銀座の歩行者天国で風船を手にした幼児が母親と歩いていた。愛らしい顔が母親を見上げた瞬間、たまたま手にしていたカメラのシャッターを切った。現像してみると、親子の信頼関係や愛情が詰まっている。「自分にも撮れる」とカメラの深みにはまった。機材に給料を費やし始めた。

30歳になると、富山の実家が気になり出し、東京の暮らしを畳んだ。金属関係の会社に転職し、重機のオペレーターになった。休日には、カメラを構えるか、映画を見るかという時間を重ねた。

10代の頃にはつまらなく思えた富山の街も足繁く通うと、興味深い人たちがいる。まちなかでイベントがあれば、写真撮影を依頼されるようになった。頼まれなくても撮った。お金をもらって撮影するのも、コンペに応募して主観で優劣を決められるのも嫌だった。ただ純粋に撮れればよかった。

◇

陶芸家の山本さんと出会ったのは2016年、総曲輪の民芸ショップだった。２年に１度、作品展があった。気になる作品を見つけた。瑠璃色のコーヒーカップがすっと手になじむ。紫がかった奥行きのある青さに魅せられた。どんな人が作っているのかと興味を持った。聞けば鳥取に窯を構えているという。

鳥取は憧れの写真家、植田正治（うえだしょうじ）の出身地。作り込んだドラマチックな写真を撮った巨匠だった。その功績をたたえるミュージアムがあり、旅行で足を運んだついでに、山本さんが主宰する岩井窯を訪ねた。

山本さんは日本の民藝運動に影響を与えたバーナード・リーチに出会い、陶芸家を志した人物。山と田園に囲まれた空間は、素朴さと民藝の思想が趣味よく溶け合っていた。壁に立て掛けられた掃除道具や、床に転がる軍手にすら味わいがあった。どこをどう切り取っても、絵になりそうだった。撮るしかなかった。

山本さんとも話す機会があった。１時間ほど一緒にコーヒーを飲んだが、映画や写真家の話ばかりに終始した。緊張して撮影したいと言い出せなかった。後日、改めて撮影をお願いすると、「いちいちポーズを取る気はない。あと作業の邪魔しないならいいよ」と承知してもらった。

「刈りばね」広田郁世

それから５年間、15回以上通った。富山から鳥取までは遠い。500キロ近い道のりは車で７時間程度。仕事が終わると、そのまま高速道路を走り、鳥取で車中泊して朝を待つ。そして出勤する山本さんやスタッフを出迎えた。

普段の山本さんは好々爺だが、いざろくろの前に座ると顔つきが変わった。ファインダー越しに真剣なまなざしを見つめた。「どれだけシャッターを切っても、いつも撮り切れていない気になる。人も場所も奥が深いんです」。通うたびに前回撮った写真を山本さんにプレゼントした。そしてまた撮った。

自身が写った写真を見て、山本さんは思った。「サプライズで写真集を作ったら面白いかもしれない」。身銭を切ることになるが、富山からわざわざ来る無名の写真家の作品が好きだった。「いつ撮られたか分からない写真ばかりで、まさにドキュメンタリー。いつの間にか僕はあの人にはノーガードになっていた」。親交が深いカメラマンには有名な人も、実績がある人もいるが、「岩井窯の空気を撮ったような写真は彼だからこそ。知名度とか、受賞歴とか関係ない」

以前から付き合いのある富山のデザイナー、高森崇史（たかもりたかし）さん(37)が鳥取に遊びに来た時に、山崎さんが撮った千枚以上の写真をすべて託した。「ここから好きなの選んで写真集にしてよ」とだけ言った。

高森さんは大量の写真を一点一点チェックし、「宝物を拾うイメージ」で写真を選んだ。「山崎さんの写真は奇をてらっていない。おしゃれにしようという作為がない。人柄でしょうね。それを生かそうと思った」

当初は内緒で本を作る予定だったが、作業の工程上、画像の元データが必要だった。さらに著作権に配慮すれば、撮影者本人の許可もいる。結局、山本さんが鳥取から電話で山崎さんに伝えた。山崎さんは「本当ですか」と静かに喜んだ。

できあがった写真集はずっしりと重たかった。黒の濃淡だけで表現された一冊は自分の感じた岩井窯が完全に再現されている。「僕の写真の力なんてほんの少し。デザイナーや印刷会社、あと岩井窯のおかげです」と山崎さん。

写真集刊行を記念したトークショーは盛況だった。写真展も開いた。会場で販売した写真集には、慣れないサインと共に「光影戯れて愉しき哉」と書いた。

◇

自分の写真集を作るのは一生で一度切りの幸運だと思っている。次に「もしも」があったら、総曲輪のコーヒーショップの一家を主役にした写真集を作りたい。若い頃は寂しく感じた富山の街も、最近は気に入っている。カメラを抱えて街に出る。

いくら好きとはいえ、鳥取に何度も通い、撮影をする山崎さんの情熱に驚かされます。岩井窯のスタッフも山崎さんの存在をすっかり受け入れ、「そろそろ山崎さんがやって来るんじゃないか」と予想しているとか。山崎さんはこれからも富山から鳥取に足繁く通うそうです。今度は作品を生み出す山本さんの手を撮るそうです。

「虹」第７巻 発売中

最新刊の第７巻「虹　補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911　高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX　0766－25－7773
mail　niji@kitanippon.jp

次回掲載は11月１日（月）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社営業局